

2022/1/09

ヨハネの手紙第一 講解メッセージ⑦

『キリストにとどまる』 I ヨハネ 2:24-29

■キリストにとどまる

「あなたがたは、初めから聞いたことを、自分たちのうちにとどまらせなさい。もし初めから聞いたことがとどまっているなら、あなたがたも御子および御父のうちにとどまるのです。それがキリストご自身の私たちにお与えになった約束であって、永遠のいのちです。私は、あなたがたを惑わそうとする人たちについて以上のことを書いて来ました。あなたがたの場合は、キリストから受けたそそぎの油があなたがたのうちにとどまっています。それで、だれからも教えを受ける必要がありません。彼の油がすべてのことについてあなたがたを教えるように、——その教えは真理であって偽りではありません——また、その油があなたがたに教えたとおりに、あなたがたはキリストのうちにとどまるのです。」（I ヨハネ 2:24-27）

「キリストから受けたそそぎの油」とは、聖霊様のことです。キリストを信じる者には、聖霊がとどまっています。そして聖霊はキリストのうちにとどまることを教えます。それは、永遠のいのちの中にとどまるということです。聖霊は三位一体の神であり、イエス様は助け主と呼んでおられます。

「しかし、助け主、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、また、わたしがあなたがたに話したすべてのことを思い起こさせてくださいます。」（ヨハネ 14:26）

人間は、魂と体から成り、そこに精神が生じたものです。魂は神のいのちが貸し出されたもので、神のもので、ですから魂は神の思いを発信し続け、体はその思いを確認する役割をしています。五官を通して体がこの地上の様々な情報を収集すると、それが神の思いにぶつかって精神が生まれます。これが人間です。しかし、私たちの体はアダムの罪によって死が入り込んで有限になったため、永遠なる神の思いを確認できなくなってしまいました。魂は神の思いを知っているのに、人にはそれが何だかわからなくなってしまったのです。

例えば、神は永遠ですから人は永遠を確認しようとしませんが、この世界に永遠はありません。この世界にはないのに人は永遠を知っており、永遠に生きられないだろうかという望みを抱きます。また、神は全能ですから、人はなんでもできることを夢見ます。そして可能性や理想を思い描きますが、現実には制約があります。この世界で神の思いを確認することは

できないとはこういうことです。このように、人は常にわからないものを抱えていて、誰もがこの不安の中に生きています。

そこで神は、人にもう一度永遠のいのちを与えるために、神に応答した者に霊のからだを着せてくださいました。私たちは肉の体とは別に、もう一つ霊のからだを持っているのです。それは神の国に属する体です。これによって、私たちは聖霊の助けを受けることができるようになりました。聖霊の助けがなければ神を信じることはできません。多くの人がイエス・キリストを信じるができない中で、あなたが神を信じるようになったのは、神の国に属する永遠のいのちを受け取り、聖霊の助けを受けられるようになったからです。だから、肉の体にとどまるのではなく、キリストの体にとどまりなさいと聖書は語っているのです。

■イエス様から目を離さない

「信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。イエスは、ご自分の前に置かれた喜びのゆえに、はずかしめをものともせず十字架を忍び、神の御座の右に着座されました。」（ヘブル 12:2）

キリストのうちにとどまるとは、イエス様から目を離さないことです。それは、「今を持つ」ということになります。この世界は「今」を持つことができません。時間は常に動いているので「今」を持った瞬間、それは過去に食われてしまいます。しかし、キリストは昨日も今日もいつまでも変わらない方です。（ヘブル 13:8）これを不動と言います。イエス・キリストという不動のものを持つことで、現在が確定し、今を持つことができるようになるのです。こうして初めて過去も未来も確定します。

そもそも「今」を持たない私たちが過去現在未来という概念を持っているのは、魂が神の思いを知っているからです。知っているのにこの地上ではそれを確認できず、私たちは過去も未来も定まらない不安を抱えています。しかし、イエス・キリストを持つことで、私たちは揺れ動くことがなくなり、平安でいられるようになるのです。ですから、次のように書かれています。

「信仰は望んでいる事ながらを保証し、目に見えないものを確信させるものです。」
（ヘブル 11:1）

今を持つことで、確信をもって未来を生きることができるようになり、過去も持てるようになります。今が不安定だと未来も過去も定まらず、過去は未処理のまま後悔と罪責感が自分を責め続けます。しかし、イエス・キリストにとどまるなら、過去は赦された過去に確定します。また、未来は天国に行くことが確定します。

「もし私たちが、キリストにつき合わされて、キリストの死と同じようになっているのなら、必ずキリストの復活とも同じようになるからです。私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられたのは、罪のからだが減びて、私たちがもはやこれからは罪の奴隷でなくなるためであることを、私たちは知っています。」

(ローマ 6:5-6)

イエス・キリストを持つことで私たちの過去は滅びました。罪は滅び、もうそれに脅されることはありません。神が完全に焼却してくださったようなものです。こうしてイエス・キリストを持つことで過去と未来が確定することが「信仰に生きる」ということなのです。

神は未来の神でも死んだ者の神でもなく、今あなたに語り、共に生きる神です。そして、あなたがキリストにとどまりキリストを見上げて生きるなら、あなたの過去と未来はキリストが示した過去と未来になります。イエス・キリストは十字架で罪を滅ぼし、三日後に復活されました。その過去と未来があなたのものになるのです。

「そこで、子どもたちよ。キリストのうちにとどまっていなさい。それは、キリストが現れるとき、私たちが信頼を持ち、その来臨のときに、御前で恥じ入るといふことのないためです。もしあなたがたが、神は正しい方であると知っているなら、義を行う者がみな神から生まれたこともわかるはずです。」(Iヨハネ 2:28-29)

イエス・キリストを信じている人は、何があっても天国に行くことができます。信じているのにいつも他のものにしがみついていたとしても、平安を受け取れなかったとしても、天国には行けます。しかし、来臨のとき、「ああ、私はちゃんととどまらなかった」と御前で恥じ入ることのないように、「キリストのうちにとどまっていなさい」と語られているのです。「キリストのうちにとどまる」とは、神への信頼を持つということです。これが神を愛することです。

神が言われた言葉を信じ、神のことばに希望を持って生きること、これが愛です。いつまでも残るもの、すなわち天国に持っていくことができるのは、信仰と希望と愛だけです。それは、神を信頼する心です。この世界で手にした富はすべてほかの人のものになります。イエス・キリストにとどまり、いつまでも残るものをしっかりと手にして歩みましょう。

■来臨の時

では、来臨のときとはいつなのでしょう。それを解釈することを終末論と言います。聖書を解釈する際に重要なことは、聖書は何と教えているのか聖書の教えにきちんと立つことです。ルター以来プロテスタント教会では「聖書のことばのみにとどまる」ことを大切にしています。しかし残念なことに、人間の想像による独断論で聖書を解釈してしまうことが幾度となくありました。それは終末論についても同様で、20世紀になってかなり修正がなされ

ています。

「来臨」つまり、イエス・キリストが来られる時のことを「終わりの日」とも呼びます。この地上で「終わり」というと、つい時間の延長で考えてしまいがちですが、神は時間の延長の上にある方ではありません。今の神です。つまり、救いの時、終わりの時は今だということです。イエス様を信じて救われたらあなたに終わりの日は来たのです。それは、時間という川に流されて生きていく人生は終わり、新しい人を着た新しい人生が始まったということです。これが一つ目の「終わりの時」です。

もう一つは、私たちが肉体の死を迎える時のことです。私たちはイエス・キリストによって霊のからだをいただいているので、肉体の死と同時に神の国に引き上げられます。つまり第一ヨハネで語られている「来臨の時」とは、「肉体の死を迎えた時」ということです。

「聞きなさい。私はあなたがたに奥義を告げましょう。私たちはみな、眠ることになるのではなく変えられるのです。終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちにです。ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。朽ちるものは、必ず朽ちないものを着なければならず、死ぬものは、必ず不死を着なければならぬからです。」（I コリント 15:51-53）

これまでの解釈の一つに、人は死んだら眠った状態になり、この世界が終わる時に神が来られて死んだ者が一斉によみがえり、最後の審判によって天国か地獄に振り分けられるという考え方があります。しかし、聖書は眠るのではなく「変えられる」と教えています。

終わりのラッパとは、あなたの人生が終わる時のことです。「死者」とは、この地上で生きている私たちのことを指します。「アダムにあってすべての人が死んでいるように、キリストによってすべての人が生かされるからです」（I コリント 15:22）とあるように、聖書が「死人」と呼ぶのは、死んだ人たちではなく今生きている私たちのことです。アダムによって死が入り込んだ結果、すべての人が神と断絶した状態にあり、体が朽ち果てたら私たちは生きることができません。これが「死んでいる」ということです。

私たちが生きるためには体が必要です。人間は霊だけで生きることができません。魂は人間のものではなく神のいのちですから、器がなくなれば神に返されます。魂が働くためには、魂を入れる器が必要なのです。神はまず人の体を造り、そこにいのちの息を吹き込み、人は生きる者になりました（創世記 2:7）。人が意識を持ち考えることができるのは、神のいのちを貸し出していただき、体が情報を収集した結果です。ということは、体を失うと私たちは機能しなくなってしまうのです。つまり、人は体が朽ちると同時に滅びるしかない存在なので、「死んでいる」という言い方をするので、永遠に生きるためには朽ちない体を必要とします。それが次のように書かれています。

「血肉のからだで蒔かれ、御霊に属するからだによみがえらされるのです。血肉のからだがあるのですから、御霊のからだもあるのです。」（I コリント 15:44）

「御霊のからだ」と訳されていますが、原文はただ「霊のからだ」です。霊のからだを着せてもらっているからよみがえられるのであって、着せられなければよみがえりません。これは次のように説明されています。

「しかし神は、みこころに従って、それにからだを与え、おのおのの種にそれぞれのからだをお与えになります。」(I コリント 15:38)

「みこころ」とは神の呼びかけに応答すること、「おのおのの種」とは魂のことです。神の呼びかけに応答しなければ、体は朽ちてしまいますから魂は神に返却されます。これが永遠の死です。しかし、神に応答した者には霊のからだを与えられます。この「与えられる」というギリシャ語は現在形です。つまり神は信じると同時に霊のからだは与えられるのです。これがキリストから与えられている油注ぎです。

永遠のいのちとは、イエス・キリストを知ることです。つまり、永遠のいのちを持っているから、聖霊の助けによってイエス・キリストを信じることができるのです。そして、霊のからだを着ている私たちは、終わりの日が来たら一瞬で変えられます。まるで脱皮するように、肉体の死を迎えると一瞬のうちに切り替わって霊のからだは私たちに支えます。この霊のからだは 100 パーセント神の思いを確認できる体ですから、私たちの不安は消えてしまうのです。その体を私たちはもう着せてもらっているのです。

「すべての肉が同じではなく、人間の肉もあり、獣の肉もあり、鳥の肉もあり、魚の肉もあります。また、天上のからだもあり、地上のからだもあり、天上のからだの栄光と地上のからだの栄光とは異なっており、太陽の栄光もあり、月の栄光もあり、星の栄光もあります。個々の星によって栄光が違います。」(I コリント 15:39-41)

ここでは、この地上でそれぞれが肉の体を持っているように、それぞれ霊のからだを持つようになるというたとえで、太陽や月や星の栄光がそれぞれあると教えられています。地上での行いによって神の国での栄光が異なるとか、一生懸命奉仕した人は神の国で偉くなれるという意味ではありません。それは、「血肉のからだで蒔かれ、御霊に属するからだによみがえらされるのです。血肉のからだがあるのですから、御霊のからだもあるのです」(I コリント 15:44) という結論からも明らかです。私たちは、霊のからだを着せられて永遠のいのちを持っているのですが、目に見えないためなかなか信じることができません。それで、神はこのように様々な表現で語り続けておられるのです。

「今にとどまる」とは、この事実を受け取ることです。信じている人はすでに永遠のいのちを持っています。このことにとどまらない限り、不安は消えません。たとえとどまらなくても永遠のいのちを持っていれば天国には行きます。しかし、この世界で神への信頼にとどまり、信頼を増し加えることを、神は望んでおられます。そのために、自分が天国に行ったときのことを考えるようにと語っておられるのです。

これらの話はすべてイエス様のこのことばから始まっています。

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からいのちに移っているのです。」(ヨハネ 5:24)

この御言葉は、原文では現在形と現在完了形が使われていて、「御子を今信じている者は、すでに永遠のいのちを持っていて、死からいのちに移された状態にある」ということです。この状態は普遍であり、変えることはできません。御子を信じた者は決して死の世界に戻ることはできず、滅びることはないのです。私たちはどんなに努力しても、過去に戻ってイエス・キリストを捨てることはできないのです。ならば、過去を振り返ることはあきらめて神を見上げて生きなさい、それが来臨の時に恥じ入ることのない生き方だと教えられているのです。

私たちはすでに霊のからだを着せられ、永遠のいのちを持っています。ですから、死と同時に一瞬にしてよみがえるのです。「最後の審判」という言葉は、聖書にはありません。神のさばきは確定しています。あなたはすでに神と共に生きる永遠のいのちを持っているのです。これが聖書の教える奥義です。

これまで福音派ではこのようなことはあまり教えられていなかったのですが、聖書に忠実に理解していくとこのような理解になりますから、福音派での終末論もかなり修正されています。私たちはキリストに継ぎ合わされて過去も未来も確定していますから、将来に対して何も心配する必要はありません。